

〈自閉症の子を持つ親〉であること (2) : 育児ネットワークに参加する親の語りを手がかりに

末次有加

本研究の目的は、〈発達障害〉の子を持つ親たちがどのように子育てを行なっているかを明らかにすることである。

近年、日本国内では〈発達障害〉概念が急速に浸透し社会的関心が集まってきている。行政レベルでは、2005年に「発達障害者支援法」が施行され、早期発見、診断、支援等の取り組みが推進されている。それに伴い、〈発達障害〉とされる人々の割合も増加しつつあるようである。とりわけ実際の保育・教育の現場では、〈発達障害〉とされる子どもの処遇のあり方が重要な検討課題として取り上げられている。また学術研究の領域でも様々な議論や調査研究がなされ膨大な蓄積が確認される。

しかしながら、これまで〈発達障害〉の子どもにおける子育てがどのようになされているか、そしてそこでの子育てのあり方はどのような要素や条件によって構成されているかといった点については、十分に明らかにされていない。そこで本研究では、〈発達障害〉の子どもの子育てを行なう親へのインタビュー調査を行い、親たちがどのような子育てネットワークに関与し、そこでどのような関係を維持しているのか、またいかにして子育てに関する知識や情報を活用しているのかを明らかにしたいと思う。具体的には、北陸地方某所で活動している当事者団体に参加する親(10数名)に対し、子育てに関するインタビュー調査を実施した。

本研究の意義は、昨今、社会的な関心を集めてきている〈発達障害〉現象が、当該の子どもやその親の子育てにもたらした意味や影響について検討することにある。そのため本研究で得られた知見や成果は、従来家族社会学領域で行なわれてきた子育てに関する研究—健全常児を前提とした子育て不安研究や親子研究—、さらには身体・知的障害家族研究の議論を活性化させ得ると考える。また、それに限らず、一般的な子育て家族に対する実践的な示唆や、少子化対策を推進する行政への政策的提言をも提供できるのではないだろうか。(※分析・結果の詳細については、当日配布のレジュメに記載します。)